

## 猪17 代々の猪撃ち = = = 猪・鹿・狸より

人品骨柄はあるいはどうだったか知らないが、伊那街道と鳳来寺道の追分に、〔澤潟（おもだか）屋の名で〕代々旅人宿を営んでいた某の家の主人なども、猪狩りにかけては、平沢禰宜に勝るとも劣らぬほどの剛の者であった。シデの大木を七廻りしたなどの、華やかな逸話こそなかったが、代々引き続いた猪狩りの名うてであった。力はあくまで強く、剛情一点張りのがむしゃらで、鉄砲は敢えて上手と言うほどではなかったが、狩場へ行っても好んで難場に当たった。何でも人並み以上のことをしないでは、物足りぬ性分だったと言う。時折思い出して耕作の手伝いなどをして、力があまって、鍬を叩き毀す方が多かったそうである。

先代はさらに輪を掛けたがむしゃらだったそうである。冬の夜など屋敷近くで山犬が吠えたりすると、如何な深夜でもむっくり起きて、マセン棒を把って、暗がりを追いかけたほどの無法者であった。その血を享けた男だけに、物に畏れる等の心持は微塵もなかったと言う。手負い猪を谷底へ突き飛ばして、殺した話があるほどだから、大抵は想像された。今でも当時を知っているものは悉くそう言うた。村の宮淵の橋普請の折、二丈幾尺の巨大な橋桁が崖に落ちかか



って、危ない危ないと大混乱の最中、上から鳶口を一つ打ち込んで、俺一人で押えているから全部下へ廻って足場を組めと頑張った。その時ばかりは、馬鹿とも無法者とも言いようはなかったと言う。しかしながら近郷の狩人たちが、手剛い猪に出遭ったたび、酒を買って山の神を祀る一方、必ずこの男のもとへ応援を頼みに行ったと言うから、見掛け倒しの剛勇ではなかったのである。

亡くなったのはまだ昔でもない明治の初年で、働き盛りの年だったと言うた。山が生んだ最後の人とも言うような、特異な性格が禍して、子供まであった女房を去らせてしまった。そしてどこやらの町から馴染の女を身請けして連れて来たが、それがまた無類の悪女だったそうである。毎日酒を煽って寝ていることと、子供を折檻するほかには能がなかった。しかも後になって、明日の命も知れぬ夫を、空家同然になった家に残して、跡を昏ましたそうである。その時ばかりはさすが剛情我慢な男も、口惜し涙を流して過ちを悔いたと言う。

二人の男の子があって、いずれも父の血を継いで、臂力は恐ろしく強かった。ただ幼い頃からひどい艱難の中に育ったせいか、背は少しも伸びなんだ。兄の

方は先祖の後を継いで、以前の屋敷跡に、名ばかりの家を構えていたのも悲しかった。弟は物心つく頃から、村の寺へ弟子に遣られたそうである。その間に何かのことから生みの親の居所を耳にして、僅か数年の一二だったと言うに、沙弥の着る衣一枚着たまま寺を抜け出して、何処をどう聞いて行ったか、三河から甲斐の鵜沢へ、母を慕って行ったそうである。それからえらい艱難に遇った話も聞いた。

これが猪狩りの名うての家の末路かと思うと情けなかった。今ではもう夢のような昔語りになってしまった。当時のいたいけな兄の方も、はや頭に霜を戴くほどになった。そうして自分の知る限りでは、今に昔ながらの山刀を、持ち伝えている。